

山縣恵美*¹ 山本容子*¹ 高尾憲司*¹ 滝下幸栄*¹ 毛利貴子*¹ 笹川寿美*¹
光木幸子*¹ 倉ヶ市絵美佳*² 岡山寧子*¹ 眞鍋えみ子*¹

*1 京都府立医科大学医学部看護学科

*2 京都府立医科大学附属病院看護部

【目的】

看護実践能力の育成を目指した授業の包括的評価として、4年生を対象に試問及び実技からなる客観的臨床能力試験(以下、試問 OSCE、実技 OSCE)を実施した。学生自身及び教員の実技 OSCE の評価から、現時点の看護実践能力の現状とその能力に対する学生と教員の認識の違いについて検討した。

【方法】

1.時期：2010年11月。

2.対象者：学士課程4年生20名。

3. OSCE の概要

到達目標：1.潜在的顕在的なリスクを明らかにし、安全安楽を考慮した正確なケアの実施ができる。2.複数患者に対し、優先度を考慮したケアのマネージメントができる。

課題：「術後疼痛のある膀胱留置カテーテル挿入中患者の移乗介助と輸液ポンプ使用中の患者への対応」

評価方法：評価表は、13領域54項目(コミュニケーション,説明と同意,臨床判断力,医療安全,感染予防,患者観察,安楽への配慮,プライバシーの保持,正確な実施,看護者としての基本的姿勢,その場に適した言動,状況把握,作業管理)で作成し、各項目は[適切に行えた]～[行えなかった]の3段階評価。教員の評価者は、大学教員と臨地指導講師。

内容：試問 OSCE30分後、実技 OSCE30分(実施15分,フィードバック8分,移動他7分)。

4.分析方法：学生の自己評価と教員評価は、それぞれ領域別に平均得点率を算出し、wilcoxon 符号付順位検定を行った。

5.倫理的配慮：口頭で研究概要及び成績には関係しないことを学生に説明し同意を得た。

【結果】

1.領域別の平均得点率：平均得点率が高い領域、低い領域は教員と学生ともに同様の傾向を示し、高い領域は、**看護者としての基本的姿勢**；教員94.4%,学生87.5%、**コミュニケーション**；教員91.8%,学生79.6%、最も低い領域は、**感染予防**；教員33.1%,学生30.6%であった。

2.学生及び教員評価の比較：2群に差があった領域は、コミュニケーション,その場に適した言動,状況把握,臨床判断力,作業管理の5領域で学生の評価が有意に低かった($p<.05$)。

【考察】

感染予防では、膀胱留置カテーテル管理や訪床時の手指消毒の得点率が低く、臨床場面における感染予防行動の適用について教育する必要がある。また、学生は教員より評価が低い傾向にあり、特に患者の反応に応じた対応が求められる項目では、学生の看護実践能力に対する自信のなさが評価の低さに反映していたものとする。患者の反応により難しい判断を伴う対応場面では、学生へのフィードバック時や自己の振り返り時に「できている点」「改善点」を明確に伝えるという教員の関わりも重要である。本報告は、文部科学省平成21年度助成事業「看護職キャリアシステム構築プラン」の一部である。

(1192文字)